The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディドロによるロシアの大学計画案
Author(s)	中尾, 雪絵
Citation	Gallia. 2006, 45, p. 15-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7479
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディドロによるロシアの大学計画案

中尾　雪絵

序

1762年、ロシアはクーデターにより、エカテリーナ二世を帝位につけ、新しい歴史を刻み始めた。エカテリーナは即位と同時に、自らの理想を実現すべく改革に着手し[1)]、ヴォルテールやダランベール、ディドロらフランスの哲学者との交流を開始する。1773年にペテルブルクを訪れたディドロは、とりわけロシアの発展に強い関心を持ち、ロシアと深く関わった。

エカテリーナ二世が最初にディドロをロシアへ召喚しようとしたのは、1762年のことである。理由は、当時フランス政府から危険書物として発行禁止を言い渡され、地下出版を余儀なくされていた『百科全書』のための安全な出版環境の提供であった[2)]。未知とさえいえる北の国ロシアからのこの申し出をディドロは即座に断った[3)]。しかし、1765年、彼が個人的な経済問題を解決するため、蔵書を売ることにしたときには、エカテリーナ二世が購入の候補となった。蔵書はディドロの自宅に置かれたまま、ディドロは「蔵書の管理者」に任命された。こうして、彼は、経済的な保証を得ると同時に、女帝の庇護下に入ることになった[4)]。

ディドロの蔵書を購入したエカテリーナは、フランスの知識人の間で、啓蒙君主として一挙に脚光を浴びた[5)]。こうしたフランス人の反応は、セルゲイ・カープが指摘するとおり、自国フランスの改革を求める彼らがロシアに寄せた過大な期待でもある[6)]。ロートラリーはこの現象を「ロシアの幻想」（mirage russe）と名づけ、18世紀のロシアをめぐるフランスの哲学者たちの夢と現実を浮き彫りにし

1）エカテリーナの改革の試みとその現実については以下を参照。Hélène Carrère d'Encausse, *Catherine II*, Fayard, 2002 ; Georges Dulac, « Diderot et la « civilisation » de la Russie », *Colloque international Diderot (1713-1784)*, Paris, Aux Amateurs des Livres, 1985, p. 161-171.

2）エカテリーナからの提案は、侍従長シュヴァロフ伯爵の書簡によってディドロにもたらされた。*Correspondance*, éd. G. Roth, J. Varloot, Éditions de Minuit, 4, 1958, p. 174. (Abréviation : CORR.)

3）ロシアでの『百科全書』出版については、ヴォルテールも介入しており、ディドロはヴォルテールにロシアからの申し出を断る意向を伝えている。（CORR, 4, p. 175-176.）

4）Arthur Wilson, *Diderot*, traduit de l'anglais par Gilles Chahine, Annette Lorenceau, Anne Villelaur, Paris, Laffont / Ramsay, 1985, p. 422-434.

5）ロラン・デスネは、エカテリーナによるディドロの蔵書購入のニュースが短期間でパリの知識人の間に広まったことを、当時の書簡や刊行物を情報源にしてまとめている。（Roland Desné, « Quand Catherine II achetait la bibliothèque de Diderot », *Thèmes et figures du siècle des lumières. Mélanges offerts à Roland Mortier*, éd. Raymond Trousson, Genève, Droz, 1980, p. 73-94.）

6）Sergueï Karp, Introduction au *Mirage russe au XVIIIe siècle*, Ferney-Voltaire, Centre international d'étude du XVIIIe siècle, 2001, p. 7.

た[7]。この現象がフランスによる一方的なものであったと見るロートラリーに対し、カープはピョートル一世やエカテリーナ二世などロシアの専制君主の野心的な改革にも着目し、「ロシアの幻想」はフランスとロシア双方から起こったものであるととらえている[8]。

実際、ピョートル一世もエカテリーナ二世も、ロシアの近代化に努力し、多かれ少なかれその成果を挙げている。特に後者は、ピョートル一世の改革の土壌を引き継ぐように、法律の制定、身分制の見直し、経済の立て直しなど様々な試みを行った。その中でも特に教育改革は、ディドロも多少の助言をしていることから、注目に値する。本稿では、エカテリーナの教育改革を確認しながらディドロの提言の内容に触れ、最後に、両者の目指したもの、その違い、また18世紀ロシアの教育問題をめぐる現実をまとめてみようと思う。

§1　«civilisation»

1763年、エカテリーナ二世は大委員会（Grande Commission）を開き、教育改革についての提言を議員に求めた。いくつか出された案のうち採用されたのは、エカテリーナの右腕でもあったベツキのものであった。ベツキの教育案によって、ロシア国内に学校の建設が行われ、孤児や女子のための学校も設立された[9]。ベツキ案の特徴は、女子も教育の対象となっていることであり、これは後年ディドロがエカテリーナの改革として高く評価することになる[10]。

だが、教育環境は地方で遅れが目立った。これは、農奴が教育の対象になっていなかったこと、農民の中に教育の必要性を感じない両親が多くいたこと、貴族の家庭で独自の教育を行う場合が多かったことなどが理由としてあげられる[11]。このため、1775年から80年にかけて、エカテリーナは公教育の充実に力を入れ始め、海外の見識者にも協力を要請した[12]。1773年から翌年にかけてペテルブルクを訪問したディドロも、帰国後1775年に『大学計画案』の執筆を依頼される。数ヶ月で仕上げられたディドロの『大学計画案』は、公教育を旨とした大学の定義に始まり、独自の教育理論を展開したうえで、具体的な学部のカリキュラムやそれぞれの授業で使うべき参考文献のリストも掲載するという詳細なものである。後にも触れることになるが、ディドロは、「公教育」の対象に農奴を含まなかったエカテリーナの改革の甘さを批判するとともに、フランスの理論重視の教育にも厳しい視線を向けており、ここで提案されている内容がフランスの教育システムの単なる焼き直しではないことは明らかである。

公教育について、ディドロは、すべての子どもに与えられるものであるという

7）Albert Lortholary, *Les “philosophes” du XVIIIe siècle et la Russie : le mirage russe en France au XVIIIe siècle*, Paris, Boivin et Cie, 1951.
8）Karp, *op.cit.*,p. 8.
9）Carrère d’Encausse, *op.cit.*, p.354.
10）CORR, 13, 1966, p. 81.
11）Carrère d’Encausse, *op.cit.*, p. 359-360.
12）*Ibid.*, p. 360-361.

ことを明言している[13]。その目的は、少数のエリートを育てることではなく、生徒全員に基礎的な知識とある程度の教養を身につけさせることである。「学校で百人の生徒に教える技術は、自分のかたわらにいるたった一人の生徒を教える方法とはまったく逆なのです。」[14]

人口ピラミッドで言えば、もっとも大きな層に目を向けた公教育は、人口増加を国の繁栄に必要なものとして考えていたディドロの思想とも合致している[15]。生まれてくる子どもに正しい教育を与えれば、数世代先には、よりよい国家ができるだろう。このような「未来」に対する期待は、ロシアに対するディドロの固定概念にも基づいている。というのも、ロシアについて語るとき、ディドロは «barbare» ということばをよく使う。ロシアは «une contrée barbare» そして「奴隷の国」であり、「自由の国」フランスの対極にあるという認識である[16]。これはディドロ個人に限ったことではない。農奴やクーデターなど、フランスにおけるロシアのイメージは必ずしもよいものではなかった[17]。むしろ、エカテリーナを擁護する立場にあったディドロも、「奴隷の国」「自由の国」という二項対立を否定するどころか、エカテリーナへの書簡の中でさえ何度も使っている[18]。とはいえ、ディドロにとって、ロシアは «barbare» であるだけに、手垢のついていない未知数な国、可能性を持った国でもあった。

> ロシア国家は、いずれヨーロッパそして世界でもっとも誠実で賢く、手ごわい国となるでしょう[19]。

これは、ディドロがロシア滞在中に何度も繰り返した表現である。ディドロは

13）*Plan d'une université ou d'une éducation publique dans toutes les sciences, Œuvres complètes*, éd. R. Lewinter, Paris, Le Club Français du Livre, 1971, 11, p. 751. ここでいう「子ども」について、女子が含まれているかはやや曖昧である。一方、エカテリーナの設立した女学校については、ディドロはこれを高く評価しており、解剖学の授業をしてはどうかと、解剖のモデルを製作しているビウロン嬢を紹介してもいる。

14）*Ibid*.

15）*Mémoires pour Catherine II*, éd. P. Vernière, Classiques Garnier, 1966, p. 198.

16）ディドロは、ロシアへ向かう際に付き添いとして同行したロシアのナリシュキン侍従について次のように書いている。「このナリシュキン氏という人は非常に紳士で、パリでは本当によくしてもらいました。野蛮な国（une contrée barbare）の人でありながら、文明化した国の繊細さを感じさせる高徳な人です。」(CORR, 13, 1966, p.41.)

17）1768年、ロシアの現状を暴露する作品が相次いで発表された。 Claude-Carloman de Rulhière の *Anecdotes sur la révolution de Russie en l'année 1762* 並びに Jean Chappe d'Auteroche の *Voyage en Sibérie* である。両者は最近までロシアに滞在した経験があったために、作品は真実味を持って受け入れられた。これらは、農奴制を批判しているほか、1762年のクーデターで、エカテリーナが夫ピョートル２世の暗殺に関わっていることを暗示するなど、エカテリーナ２世にとっては都合の悪い内容であった。Lortholary, *op.cit*., p. 186-197 ; Princesse Dachkoff, *Mémoires de la princesse Daschkoff*, éd. Pascal Pontremoli, Paris, Mercure de France, 1989, p. 156-157, p. 200-202.

18）ただし、これは個人的な対比でもある。「人々が自由な国 (le pays qu'on appelle des hommes libres) では私は奴隷 (l'âme d'un esclave) であり、人が奴隷と呼ばれる国 (le pays qu'on appelle des esclaves) では自由 (l'âme d'un homme libre) でした」。(CORR, 14, p. 12) すなわち、フランス国内で危険扱いされていたことと、「専制君主」エカテリーナの膝元で手厚い保護を受けたことを意味する。

19）CORR, 13, p. 76.

ロシアをいわば準備段階にあるととらえ、その未来に期待していた。このことは、エカテリーナとの対面の様子を描いた『エカテリーナ２世のための覚書』において国家のあり方を語るディドロの姿と重なる。「哲学者は現在のことを空しく話すのではなく、未来のために書き、思考するのです[20]。」それでは、ロシアに「未来」をもたらすものとは何だろうか？　«Civilisation» である。«Civilisation»とは、具体的に何を指すのか？　教育である。

> 国を教育すること、それは国を教化（civiliser）することです。（...）奴隷や未開の人々は、運命を分け合っています。教育は人間に尊厳を持たせます。尊厳を持てば、人は奴隷の身分に生まれるわけではないということを認識できるでしょう[21]。

このあからさまな表現は、農奴の解放に失敗し、これを事実上放棄してしまったエカテリーナへの批判であると同時に、エカテリーナ自身の «civilisation» の必要性を促してもいる。18世紀の «civilisation» という語の解釈に関して、スタロバンスキーは、思想の歴史の最終段階であり、新しいものの受容を意味するものである、と述べている[22]。ここから、«civilisation» は二つの解釈に分かれる。一つ目は、ディドロが『ブーガンヴィル航海記補遺』で扱っているような文明と未開の問題である。未開（sauvage）の土地「タヒチ」は、文明化社会が失ったり、抑圧している人間の本性・自然を保持しつづけるユートピア的世界であり、ここに «civilisation» を持ち込むことは否定的にとらえられる。一方、二つ目の解釈として、«civilisation» は改良すべき状態から見たときの到達点と考えられる。例えば18世紀のロシアは «sauvage» と同義に扱われることの多い «barbare» であってもユートピアではない。ロシアの現状は厳しく、その可能性は未来にかかっている。つまり、«barbare» から «civilisation» へと移行させなければならないのである。

先に挙げた引用で、ディドロは「尊厳を持てば、人は奴隷の身分に生まれるわけではないということが認識できる」と述べている。«civilisation» によって、人は自由であることを理解する。「奴隷のいる国」ロシアの発展には、国民の意識の変化が不可欠である。このようなディドロの考えが、やがてフランスで現実のものとなる大革命をも想起させる急進的な思想であることは、容易に想像できる。

なお、ディドロは «barbare» という語をロシアのみにあてはめているわけではないことも注意しておかなければならない。フランスの学校について語るときにも、«barbare» という語を使う。実際、ディドロはロシアに向けた教育システムを述べるために、フランスの教育批判を行っており、その主張の目的はロシアを隠れ蓑にしたフランス批判とも思われるほどである。

20）*Mémoires pour Catherine II*, p. 235.
21）*Plan d'une université*, p. 745.
22）Starobinski, *Le Remède dans le mal*, Gallimard, 1989, p. 15.

§2　ディドロの教育プログラム

『大学計画案』は、公教育の定義に続き、大学（université）制度について、フランスを常に例にとりながら、細案を出している。内容が詳細であることは、複数の学校で多くの子どもが等しく同じ教育を受けることができるように、という配慮であろう。具体的な時間割や参考文献がマニュアルのように提示され、学部・学年ごとに何を学ぶか、どのような教師を採用するべきかといったことまで踏み込んで書かれている。学校の建物についても、各学部を独立させること、図書室を完備することや、各学部に付属する建物（教会、寮、教師用の住宅など）を併設することなど、細かく示されている[23]。

「大学」とは、現在の高等学校から大学の教養課程にあたり、年齢制限はないが、十五歳程度から入学できるとされている[24]。大学は、技芸（art）、医学（médecine）、法学（jurisprudence）、神学（théologie）の四学部に分けられ、さらに政治を学ぶ学校、軍隊学校、商業や農業、芸術学校と複数の専門学校が設置されているが、これら専門分野について、ディドロは詳しく述べることを避けている。また、大学の第四学年に構想されている音楽、ダンス、フェンシング、乗馬についても、上流社会には必要だが、公教育においては重要度が低いという理由からやはり省略されている[25]。従って、大学の第３学年までのカリキュラムが提案されることになるが、その授業内容は、ディドロ自ら認めているように『百科全書』の知識の系統樹を応用したもので、特に、第一学部・技芸については、年度ごとに科目を詳しく分けた図表が挿入されている。

ディドロが提示する教育理念の特徴は、どれもフランスの大学の反省を踏まえていることである。例えば、フランスで「技芸」を学ぶ際、ギリシャ語・ラテン語、修辞学、論理学、倫理学、形而上学などの習得に７、８年を費やす理論重視のやり方をディドロは「牢獄」と表現し、ロシアで取り入れるべき公教育の方法としてはふさわしくないと強調する[26]。ディドロの教育案では、最初に学ぶのは数学、物理で、その後、自然学、ロシア語と続き[27]、フランスの大学が行っている科目はこれらの後にくる。卒業後に役立つもの・必要なものが、より優先されているからである。

フランスの法学についても、「我々の時代の法とは、関係のないローマ時代の法律を隅々まで学んでいる[28]」と述べ、ロシアの大学案では自然法や法制の歴史だけではなく、現代の市民法や刑法などを学ぶことを提案している。

医学部についても同じことがいえる。フランスの医学部では、理論ばかり詰め

23）*Plan d'une université*, p. 857.
24）*Ibid.*, p. 846.
25）*Ibid.*, p. 767.
26）*Ibid.*, p. 753.
27）ロシア語の学習について、ディドロは「何か一つ言語を正しく書き、話さなければならないとしたら、それは自国の言語であろう」と述べ、フランスの教育が重視していたラテン語とギリシャ語より優先権を持たせている。*Plan d'une université*, p. 786. また、軍隊学校のための提言の中でも、海外から招かれた外国人教師よりもロシア語のできる教師を登用するべきだと強く主張している。（*Mémoires pour Catherine II*, p. 210.）
28）*Plan d'une université*, p. 754.

こみ、実践がないとディドロは主張し[29]、「若い医師は、初めての治療を我々の身体で行うことになり、殺人を繰り返すうちに、ようやく一人前になる[30]」と皮肉っている。『大学計画案』は、１）解剖・出産、２）医学概要、３）外科、４）医学・薬学、５）病気の症状や手当て、というように実践的な内容を多く含んでいる[31]。また、人体を用いて授業を行うことや、学校に付属病院を設置して学生が実地で学べるような施設を提案している。「２部屋からなり、各部屋には25台のベッドを設置する。一部屋は急性疾患の患者、もう一部屋は治療に時間のかかる患者を収容する。医学生は授業を２年にわける。一年目は急性疾患の患者を治療し、二年目に長期治療の患者と接するのである[32]。」現代から考えれば解剖の授業など当たり前だが、当時のフランスでは宗教的な理由から、特に人体の解剖は非常に困難であり、ここにもディドロのフランスに対する批判が込められている。

無神論者であったディドロが神学部について言及していることも興味深い。フランスの神学部については、ルター派や理神論、無神論と争っているが、神学部の内部にもそれらを信じる者があることを偽善と指摘する[33]。また、君主が宗教の前にひれ伏すことを「奴隷のよう[34]」と表現し、司祭が必要かどうかの最終的な判断はエカテリーナ自身にゆだねられている。そのうえで、神学部で学ぶべきことは聖書であり、そのためにはラテン語やギリシャ語、ヘブライ語の習得も必要となる[35]。神学部に対する提案は、ディドロの個人的な宗教観を超えたものであるが、全体に否定的な要素が見え隠れするのも事実である。

このようにディドロの公教育計画案は、特別なエリートを育てるのではなく、学校を卒業した子どもが社会で生きていくために必要なものを身につけることが目標であり、将来の役に立つ実践的なものが重視されている。と同時に、この計画案自身が、わかりやすい内容と具体的な指示を特徴としており、理想を掲げる以上に、教育の現場で実践できることをディドロが強く意識していたことがうかがえる。

§３　改革をめぐる現実

この教育案が、すべてではないにせよフランスの教育システムの問題点を参考に作られていることは、その急進的な内容と実現のむずかしさを意味する。一方で、『大学計画案』が実現可能かどうかは、その内容だけでなく、エカテリーナの判断力にもゆだねられていた。実際、ディドロの蔵書を買い上げたとき、エカテリーナ二世は「すぐれた君主」として注目を集めた。啓蒙哲学者への理解だけでなく、その政策も急進的なものであった。1765年から翌年にかけて、エカテリーナ自ら執

29）*Ibid.*, p. 756.
30）*Ibid.*, p. 756.
31）*Ibid.*, p. 820-821.
32）*Ibid.*, p. 817-826.
33）*Ibid.*, p. 755.
34）*Ibid.*, p. 832.
35）*Ibid.*, p. 834.
36）*Mémoires pour Catherine II,* p. 235.

筆した政策方針（*Grande Institution*）には、拷問に反対であるという立場が表明されており、これが原因となって、フランスはこの政策方針のフランス語版の出版を禁止したほどである[37]。ディドロの期待は、こうしたエカテリーナの政治の大胆さに起因するものであり、その実行力は大いに期待されたのである。

だが、このようなディドロをはじめとする啓蒙哲学者たちの期待に、エカテリーナはどこまで応えることができたのだろうか。1762年から数年間見せていた旺盛な改革には、手痛い現実が待ち受けていた。貴族階級の激しい反発に加え、コサックによる内乱（プガチョフの乱）は、ディドロがロシアを訪問中にもまだ終わっていなかった。トルコとの間に始まった戦争は結果的に勝利したものの、国内改革の速度は確実に落ちていた[38]。

建て直しを図るかのような1775年から80年にかけての教育改革は、トルコ戦争の終焉（1774年）により、エカテリーナの政治が再び国内の安定を目指すようになったことを示すものである。そして、成果は少しずつ現われていた。エカテリーナは自ら複数の私立学校を設立していたが、それを真似ようとした貴族たちが相次いで私立学校を開設し、そのうちのいくつかはすぐれた教育で有名になった[39]。公教育についても、農奴を教育の対象にしないという点で、エカテリーナはディドロの計画を実現させることはなかったが、都市と地方で設立すべき学校の数を義務づけたほか、小学校に入学する年齢を定め、首都の学校すべて（公立・私立）の授業調査を行うなどして、学校制度の確立に努めた。

ディドロの思想は未来を見据えたものであり、おそらくその期待はエカテリーナの後継者にも向けられていただろう。ディドロは自らの作品を後世の人々のために書き続けた哲学者である。短い期間での判断であれば «mirage» に過ぎないが、ディドロの視野はあくまでも広かった。

ところで、ディドロの執筆した『大学計画案』は、その後どうなったのだろうか。実は、エカテリーナのもとへ届けられたまま、どのように使われたのか、あるいはまるで使われることもなかったのか、あらゆる情報が欠落している。エカテリーナは、受け取った『大学計画案』は「仕事がひと段落したら読むつもりである」と書簡に書いているが[40]、実際に読んだのかどうかは、定かではない。ディドロが自ら提案したロシア版『百科全書』の計画も、同じような経緯でロシア側からの連絡がとだえ、実現せずに終わった。だが、今挙げたような教育改革のある程度の成果を見れば、ディドロの提案は必ずしも無駄にはなっていないことがわかる。

また、教育をめぐるいくつかの変化について言及するなら、ディドロと親しかったダシュコフ夫人が、エカテリーナの任命によりペテルブルク科学アカデミー、

37）Carrère d'Encausse, *op.cit.*, p. 107.
38）Dulac, *op.cit.*, 1985, p. 161.
39）Carrère d'Encausse, *op.cit.*, p. 358-359.
40）1776年1月31日のグリム宛の書簡にエカテリーナのこの記述が見られる。ディドロが『大学計画案』を完成させグリムに託したのが1775年の8月であったことを考えれば、この返事が極めて遅いということは事実である。(CORR, 14, p. 184.)

さらにロシア・アカデミーの総裁に就任したあと、アカデミーに付属する学校の改革を成功させ、ロシアで初めてのロシア語辞典を完成させた[41]。十九世紀になると、女子を対象とする教育も大きく発展し、エカテリーナの教育改革は都市部を中心に少しずつ成果を見せ始めた。フランスでも、ディドロとも親交のあった百科全書派のコンドルセが、ディドロの教育案に似た教育プログラムを革命後のフランスで実現させた[42]。これらは、ディドロの直接の関与ではなく、またディドロの影響がどこまで含まれているかも明らかではないにせよ、彼が望んだ«civilisation»がまったくの幻想ではないことを裏付けるものである。

歴史の表面をなぞるなら、ディドロのロシアへの貢献はわずかである。だが、啓蒙専制君主エカテリーナ二世と哲学者ディドロの結びつきは、必ずしも見世物的なものではない。二人の間には、新しいロシアを目指すという共通項があり、両者はそれぞれ、その進歩的な思想と現実の融合に苦しんだ。フランス国内では危険人物扱いされ、思うままに作品を発表することもできなかったディドロには、エカテリーナの現実がだれよりも理解できたのではないだろうか。

（ナント大学修士課程在学中）

41）小野理子、『女帝のロシア』、岩波新書、1994年、175-186頁。

42）Robert Niklaus, «Le *Plan d'une université* de Diderot et le *Plan d'instruction publique* de Condorcet mis en regard», *Diderot Studies*, 24, 1991, p. 105-107. ディドロの教育案をコンドルセがどこまで詳しく知っていたかは定かではないものの、この作品はサロンで読まれるなどしており、ある程度は把握していた可能性が高い。（CORR, 14, p. 155）